

研究ノート

中華民国 80 年の社会

——『少年大頭春的生活週記』の台湾 内政編（その3）——

高 橋 明 郎

1 はじめに

台湾のベストセラー作家張大春の『少年大頭春的生活週記』は、新聞連載小説として作品が執筆された民国80（1991）年の台湾社会の動きと並行して話が進行していく。作品中に取り上げられた事件について、筆者は国家中央図書館所蔵の『聯合報』マイクロフィルムをもとに、内政編（その1，その2）、人物編，社会事件編（その1～その4）⁽¹⁾をすでに示し解説したが、今回は内政について続ける。

なお、本編の基本資料は上述のマイクロフィルムであるが、これとは別に、今回扱った時期、台湾の各紙や他のメディアに目を配った記録として、井原吉之助編「台湾の政治改革年表・覚書（郝柏村時代）」⁽²⁾がある。これは、年表・覚書の性格として、あくまで時系列を重んじ、一つの事態の推移を必ずしも最後まで追えないことや、あくまで政治改革や政策関連事項に限定されているので、社会全体の動向を見るには十分でない憾みはあるものの、同時代の地道な観察の集成であり、今日から見ても、資料価値は減じない。本編をまとめるに当たり、91年前半の議会動向を追う上で、非常に助けとなった。

(1) 『中華民国 80 年の社会～『少年大頭春的生活週記』の台湾 内政編 1（2001 年 3 月香川大学経済論叢 73 巻 4 号）、「同内政編 2」（2006 年 3 月同 78 巻 4 号）、「同人物編」（2003 年 3 月同 75 巻 4 号）、「同社会事件編 1」（2002 年 3 月同 74 巻 4 号）、「同社会事件編 2」（2004 年 3 月同 76 巻 4 号）、「同社会事件編 3」（2005 年 3 月同 77 巻 4 号）、「同社会事件編 4」（2007 年 3 月同 78 巻 4 号）

(2) 帝塚山学院大学教養学部紀要 第 29 輯（1991 年 12 月）

2 立法院の乱闘事件

立法院第八八會期開議發生有史以來最嚴重的郡毆事件。

80. 9. 22~80. 9. 28 《勒索案》重要新聞 (P. 47)

2.1 推 移

台湾議会というと、男女を問わず議員達の勇猛果敢な行動が屢々報道される。が、この時の混乱は「国会史上最も混乱した開会日（立院歴來最混亂的開議日）」と報じられたほどのものであった。

第88期立法院会議は、9月24日(火)に開幕したが、民進党議員団は郝柏村行政院長の施政方針演説出席をボイコット（杯葛）、衛視に守られた郝柏村行政院長（首相）はかろうじて演説を終えたが、演説は野次で聴き取れず、その後の代表質問は中断、27日(金)に延期された。

郝柏村行政院長は当日11時に登壇、野次の中、40分にわたり演説をしたが、首相の施政方針演説が野党議員にボイコットされ、衛視の保護下に実施されたのは、44年、八十数回の立法院議会で初めてだと『聯合報』は報じている。この事態に、演説が終わると梁肅戎立法院長が遺憾の意を表明した。一方郝柏村行政院長は議場の国民党議員にVサイン（こういう場合、日本でよく見られるような二本指ではなく、両手を掲げて行う）をし、その写真が紙上に掲載されている。

施政方針演説とそれに続く、趙振鵬委員の代表質問後、野党議員が演壇を占拠して、首相の答弁ができないまま、審議は中断した。

野党の手段はかなり過激で、魏耀乾委員は、鉄のマイクを郝柏村行政院長に投げつけた。マイクは衛視の盾に遮られたが、衛視一人の胸に当たった。彼はまた、議席の灰皿を梁肅戎立法院長に投げつけ、これも衛視の盾に遮られたが、その際割れて飛び散った。『聯合報』によれば、民進党議員がこれまで使ったものは、煉瓦の欠片、靴、本、書類など種類豊富だが、今回投げつけられたものが、一番固いもので、また、立法院長目がけて物が投げられたのも初のことだという。

同紙はまた、施政方針演説時の議場の写真も示しているが、演壇前を盾を持った警備員がぐるりと議場に向かって取り囲んでいる。同紙によると、この盾は議場から投げつけられる紙つぶてを防ぐためのものである。また、野党民進党議員は机上に立って横断幕を掲げている。

この日から数日に渡る議事混乱の大元は二つで、刑法 100 条問題と立法院委員の資格を回復した黄信介民進党主席の扱いをめぐる問題であった。

伏線は、23 日(月)に、刑法百条修正問題（拙稿前編「中華民國 80 年の社会～『少年大頭春的生活週記』の台湾 社会事件編（その 4）」3.2 参照）で与野党の協議が決裂したことである。この問題が強く社会的関心をひくものであったことは、前篇で既に触れた。このため、与野党とも引くに引けず、院内各所でこぜりあいがあり、加えて昼には群賢門で、登院する古株立法委員の車のガラスが議会周囲の群衆により割られる事態も起こった。刑法百条行動連盟メンバーも、立法院の内外で警備員とこぜりあいとなった。

刑法百条問題については、既に前篇の台湾大学孫震の辞任騒動で触れているので、ここでは、この日の動きのみ記録しておきたい。

開会直前の 9 月 21 日が「100 行動聯盟」初回の大会で、中央研究院の李鎮源、台湾大学の陳師孟、張忠棟、林山田、瞿海源、中興大学の廖宜恩、長老教会の楊啓壽、比較法学会の陳傳岳、公民投票会の蔡同榮、関渡療養院の陳永興、小説家の鐘肇政が発起人となった。

この問題のこの日の焦点は、刑法百条廃止まで野党が要求したことであった。国民党側は、あくまで修正問題という捉え方である。国家転覆の策謀に対する刑罰は、およそ国家であればほとんどが持っているもので、それは民主主義であろうと、他の政治体制であろうと違いはない。従って、国民党側が、これは現実的な要求といえないと考えても無理はない。『聯合報』は国民党スポークスマンである祝基澄の見解を紹介しているが、修正でゆくこと自体は 23 日の与野党協議で合意しているのに、急に要求をつり上げてきたというものであった。

ただし、郝柏村行政院長のこの日の施政方針演説には、刑法百条問題に関することは含まれず、当然の事ながら、内政外政の目標を網羅したものであった。25 日付『聯

合報』は内容を箇条書きで示している。

即ち

- 1) 金門・馬祖の戒嚴令早期解除による地方自治恢復
- 2) 台湾省長及び直轄市長の直接選挙
- 3) 実務（中国語では「務實」）外交推進
- 4) 東部地区への大学設置と暨南大学の復興⁽³⁾
- 5) 中国鋼鉄や台機のような公営企業の民営化
- 6) 2万8千ヘクタールの農地の転換
- 7) 北宜高速道路の建設
- 8) 国民皆保険を目標に「全民健康保険法」の制定
- 9) 中国と協調して海上治安を守る

といったことである。

郝柏村行政院長は第2項目を最重要課題としたが、当時の呉柏雄内政部長が指摘した通り、実施には現憲法の一時凍結と憲法改正が必要で、この後も慎重な作業が進められることになる。⁽⁴⁾

翌日も、民進党はボイコットの態度を崩さず、これに国民党側も態度を硬化させる。国民党では、民進党がボイコットを続けた場合の対応を協議するため、政府と党幹部が26日に集まった。郝柏村行政院長や梁肅戎立法院長に加え、党側から宋楚瑜秘書

(3) 暨南大学は言うまでもなく中国の有名大学で、そもそも清の光緒32年に兩江總督の上奏により南京に設置された華僑のための暨南学堂を起源とする。尚書禹貢からその名前を取った。後上海に移り、上海の大学は結局復旦大学に統合されたが、1958年に広州で再開した。昨2006年創立100年を迎えた名門である。

私たちの世代にとって、当時入手できた大陸出版の唯一の文学史「中国文学発展史」を著した劉大傑や小説家の王統照、『宋詩選』の錢鐘書らは、上海もしくは広州の暨南大学の教壇に立っていた。国民党政府来台後、中国の名門大学の名前は、教員が政府と共に移住してくる場合も少なくなかったのが、台湾でそのまま使われることが多かったが、この民國80年当時の復学構想も、中国意識の発露である。

暨南大学は結局同年にプロジェクトチームが設置され、民國84年(1995)中部南投縣に開学したが、さすがにこの時代に大陸と同名のものを新設するというのも憚られたのか、結局暨南国際大学という名称で開学した。

(4) この時直轄市や省長直接選挙の障害として指摘されたのは、当時の中華民國憲法第108条、第112条、第118条である。

長、林棟政策会主任委員、饒穎奇立法院党部書記長、祝基滢文工會主任、当月の当番委員の蘇火燈、政府側から王昭明行政院秘書長、高銘輝政務委員、議会から劉松藩立法院副院長が参加したこの会議で、おおむね次の対応が了承された。

すなわち、ボイコットが続く場合、各大臣は10時30分までは大臣席で待つが、それを超える場合は行政院長ともども退席する。民進党が暴走を繰り返した際は、衛視により、議場外に民進党議員を排除する。議場の混乱がひどいときは、饒穎奇立法院書記長の動議により代表質問を一時停止する。黄信介主席の辞任演説は、彼が立法委員の身分を回復しているので、議事録確認後発言待ちの順番で、認める。もし順番を繰り上げての発言を求められた場合には、議場の議員の意向で決する。黄主席の発言が穏当でなかった場合は立法院長が制止する。刑法百条について即時廃止提案があった場合は、午後5時半以後に継続審議とする。

この席で議長を副院長に任せてはという議論も出たらしいが、梁肅戎はこの日は自分が議事を進めるという意向であった。郝柏村行政院長は政府側として党の対応を支持する旨発言、一部出席者から、より強硬な提案もなされたが、上のように落ち着いた。

27日の議会は、ほぼこの打ち合わせ通りに進行した。民進党のボイコットが続いたため、動議による代表質問停止が決まり、10時30分に閣僚は退席した。これは『聯合報』も28日付の見出しに「憲政特例」と書いたように、中華民國議会として初めてのことであった。

国民党は、次週に郝柏村行政院長の出席を求めて代表質問の代わりに党政座談会を開くこととした。

これよりさき、立法院では、野党の希望を容れ、黄信介民進党主席の辞職演説を許した。梁肅戎立法院長が、民進党立法院委員団の彭百顯幹事長に特別発言を許し、黄主席の演説紹介を行わせた。これに社民党の朱高正が、自身の議事録確認が先だと抗議し、民進党議員が抗議する中、演説を強行した。その後黄信介主席の演説があり、続いて林棟が演説した。

ところが、この後民進党の田再庭委員に続き、社民党の朱高正が再度発言することになったことから、民進党は、議長が朱高正を轟退していると詰め寄った。しかし梁肅戎院長は、議事録、議事進行、報告事項で発言を求める議員は既に60人以上いること、民進党が代表質問をボイコットしたまま、こうした発言ばかり続けていることから、結局9時58分になって10分間の休憩を宣告した。

休憩の間、与野党の委員が協議したが物別れとなったため、梁肅戎院長は、郝柏村行政院長、林棟政策会主任委員、饒穎奇立法院党部書記長、黃正一同副書記長、当番委員の蘇火燈、劉松藩立法院副院長を呼び、再開後正常化の努力をしてみるが、無理な場合は、予定通り代表質問を休止する意向を伝えた。

再開後も民進党は、相変わらず発言を求め、陳定南委員が演壇に上がったまま動こうとせず、一方朱高正と民進党の口論から殴り合いに発展しそうになったので、与党側はこの日の議事進行をあきらめ、10時28分、代表質問の一時休止動議が出された。

饒穎奇と廖福本の2委員が行政院長以下大臣の退席後代表質問を休止し、法案審議をするという提案をし、議長の指示で、廖福本が趣旨説明を行った。

当然民進党側は、質問権の剥奪だと抗議、一方与党側も、李勝峰委員が、結果的に自分たち与党議員の質問権も奪うことになったのは民進党のせいだと応じた。動議の採決が行われ、当日出席した105名中86名が賛成して、動議が可決された。これをもって、10時30分首相以下大臣は退席、その後も民進党は刑法100条問題を論じていたが、次第に議場は閑散とし、結局一つの法案も決まらないまま、時間前に散会となった。

2.2 民國80(1991)年の議会

民國80(1991)年は、議会にとっては、次のような年であった。

總統選出などを司る国民大会が、前年に続き臨時大会として4月に開かれ、憲法修正への重要な一步を踏み出した。これは与党の修憲小組が前年末に提示した憲法修正のスケジュールによるもので、この大会で、修正までの臨時条文を考え、年末に国民大会選挙(80年の歴史にして実に2回目)を行い次の過程へ進むという予定であった。国民党は8月14日には修憲小組で、実質的な作業に着手した。結局民國81(1992)

年 3 月に修正が行われたが、これについては、別稿に譲る。

しかしながら、この憲法修正を機に、在野勢力では、一気に国号の変更、台湾独立などを進めようと主張するグループもあり、野党の民進党は、独自の憲法案を作る段階でも大もめにもめることになる（のち 8 月に台湾共和国憲法草案をまとめる）。

もともとブラックリスト解除にも反対だった郝柏村行政院長は、台独分子の帰国や、そのおおっぴらな活動に対し、各種答弁で非難を隠さなかった。このため、郝柏村への民進党の視線はいよいよ陰しくなっていく。

支持者に台湾独立派が少なくない民進党は、勢い国民党にあらゆる面で強硬姿勢を見せざるをえなくなっていた。この小説で扱われたのは、9 月立法院での混乱だが、実は 4 月の国民大会や立法院でも暴力沙汰が起こった。その代表的なものは、4 月 12 日立法院で展開された、民進党張俊雄立法委員と、梁肅戎立法院長のビンタ合戦で、9 月議会で議長を梁肅戎立法院長から劉松藩副院長に移す提案がされたのにも、こうした伏線がある。この時も民進党は 15 日以降、国民大会をボイコットし、16 日からは立法院がボイコットを開始し、結局これは 6 月まで続く。

2.3 黄信介問題と赦免法

黄信介は、台湾の民主化運動では、著名な人物であった。しかし、民進党の中では、結成時に獄中にいたということもあって、当初の過激な独立運動とは一線を画した穏健派という捉え方がされていた。

高玉樹の台北市長選出馬をきっかけに政治活動に入り、民國 58（1969）年の中央民意代表補充選挙で立法委員となった。実はこの補充により彼が手に入れたのが終身議員という身分である。だからこそ、この時の彼の辞職は、居座り続ける大陸出身万年議員達への痛烈なアピールになりえたのである。台湾で反国民党的立場で地道な活動を重ねた康寧祥（後出）が立法委員になるのは、これより遅れた民國 61（1972）年の増加定員選挙でのことである。因みに、同じ 61 年、黄信介の弟である黄天福は、国民大会代表に当選した。

黄信介は所謂「党外」勢力を集めて「台湾島外人士助選団」を組織した他、反国民党活動の上で象徴的な雑誌「美麗島」の発行人となる。国民党にとっては、当時の戒

厳体制にあからさまに反対する人物で、そのため自宅が襲われたりした。

民國 68 (1979) 年 12 月の美麗島事件 (高雄事件) では、事件を首謀したとして軍事法廷において叛乱罪で有罪となった。

12 月 13 日に美麗島社が当局の指令で閉鎖されると、翌 14 日、立法院は蔣経國總統の指示で緊急會議を開き、党外の立法委員黄信介を叛乱罪容疑で逮捕することを決定した。そして汪敬熙台湾警備総指令は黄信介を他の 11 名とともに軍事裁判にかけすることを命じた。多くの逮捕者を出した後、当時の国民党新聞局長だった宋楚瑜は事件報告書を出し、「不嚴懲這伙不法之徒，台湾將亡，國家將亡，民族將亡（この不法の輩を嚴罰にしなければ，台湾も國も民族も亡んでしまう）」と述べた。台北で行われた軍事裁判で、黄信介は懲役 14 年を宣告され、立法委員の資格を剥奪される。⁽⁵⁾

民進党は、設立当初康寧祥を首領とするグループや所謂「新潮流」グループが対峙していたが、美麗島事件の被害者が次々出獄して来るにつれ、「美麗島」グループが力を増した。所謂穩健派の色が濃くなる中、黄信介も、民國 77 (1988) 年に、江鵬堅、姚嘉文に続く第 3 代民進党主席となった。そして、この 80 年に許信良に交代した。

美麗島事件による有罪判決により立法委員資格を剥奪されていた黄信介だったが、台湾の大法官會議（憲政解釋機關）は、この議會の前に黄信介の資格回復を認定していた。

開会時点で、郝柏村行政院長は法的根拠がないとつっぱね、これが何より民進党議員の攻撃の的となったもとである。しかしながら、同日、赦免法が改正され施行されたため、大赦特赦による復職が認められることになり、結果、黄信介の委員資格は回復された。週後半の演説の根拠は、この初日の法改正により得られたものである。

黄信介は、結局 27 日に辞職するが、その台湾語による辞任演説で、他の委員達にも同調して辞任するように呼びかけた。⁽⁶⁾

(5) 言うまでもなく、この時の黄信介の弁護人が、現台湾總統の陳水偏である。

この与野党の騒乱の中、民進党を余計刺激した朱高正についても、簡単に補足しておかねばならない。学歴好きの台湾の中でも台湾大学法学部卒で留学歴もある彼は、目立つ存在であり、加えて20代で民進党から立法委員選挙に出馬して当選、しかしこの頃から歯に衣させぬ言動とパフォーマンスが目立ち、この後の選挙では非公認で出馬、それでも国民党候補の3倍以上の得票があったが、結局民進党から除名された。

この2年後李登輝総統に長文の公開書簡を示し、それを立法院の演壇で読み上げる⁽⁷⁾ことまでした。この「天下至廣、非一人所能獨治—給李登輝先生的一封公開信」では、蔣経國死去の時点から語り起こし、王船山の『宋論』を引きながら、李登輝の政治の節目節目での判断を非難している。文中、野党の身ながら、国民党の大物で行政院長だった李煥から意見を求められたとか、郝柏村内閣が成立した際、野心があった宋心連を慰めたという話まで暴露したくらいで、この日のパフォーマンス程度は何とも思っていなかったに違いない。

2.4 結 末

与野党激突の後にらみ合い状態が続く国会に対し、李登輝総統は仲介作業に入る。それは彼らしいといえれば彼らしく、民進党はもちろん、国民党側も本省人の要職者を集めて、協議の場を作ったのである。この時参集したのが、与党側が謝東閔（国民党中央常務委員）、林洋港（司法院院長、国民党中央常務委員）、高玉樹（国家統一委員会副主任委員、元台北市長、本来無党派だが、やがて国民党に入った。⁽⁸⁾）、蔡鴻文（元台湾省議会議長）、辜振甫（海峡交流基金会董事長、国民党中央常務委員、国家統一委員会委員）、呉伯雄（行政院内政部長、大陸委員会委員）、康寧祥、野党側から黄信

(6) 闘争手段としての議員の辞職は、遡れば民國 74 (1985) 年の5月、台湾省議会で、14人の党外議員が集団辞職したことがある。しかしながら、黄信介辞任の意味は、先述のように、むしろ辞任しない老賊を視野に、自分の終身議員の身分を退職金も返上して放り出して見せたことにある（老賊議員達は、退職手当の増額を強く要求していた）。

(7) 民國 82 (1993) 年1月13日に公開されたこの書簡は、現在例えば、張覚明の『審判李登輝』（民國 84 年、學鼎出版、新店）などで見ることが出来る。

(8) 高玉樹が無党派ながら台北市長に当選したのが民國 53 (1964) 年で、これに危機感を抱いた国民党は、台北などを直轄市として、市長選挙をやめ、市長任命制に切り替えた。これを再度民選に戻そうという動きが、ようやくこの小説の時期実現したのである。

介、張俊宏、張俊雄、そして中央研究院の李遠哲である。

しかし、この調停でも格別の成果は見られず、間もなく近づく閱兵式の混乱を避けるため、実質的に議会は休会状態になる。その間に百条問題や憲法修正の摩擦は外に場を移し、前編の台湾大学騒擾に繋がってゆくのである。

最後に、この時期の関係者のポストを整理しておく。

宋楚瑜：国民党中央委員会秘書長

饒穎奇：国民党中央委員会副秘書長

廖福本：国民党大陸工作会副主任

祝基滢：国民党文化工作会主任，国家統一委員会研究委員

王昭明：行政院秘書長

梁肅戎：立法院院長

林棟：政策会主任委員

饒穎奇：立法院党部書記長

黄正一：同副書記長

劉松藩：立法院副院長（のち院長）

（接）